遣新羅使の挽歌

到壹岐嶋　雪連宅満　忽遇鬼病　死去之時　作歌一首

（天平八年、万葉集　巻一五の三六九０　詠み人知らず）

【訳】壱岐島に着いた時、雪連宅満が急に鬼神に取り憑かれたような不思議な病に遇って死去した時に作った挽歌を一首捧げる

世の中は　常かくのみと　別れぬる
君にや元無　吾が孤悲行かむ

【訳】世の中はいつもこうして別れが来るものなのか
君への　どうしようもない悲しみを、
私は一人抱えて、旅を続けるのか

大宝元年（７０１年）に施行された国郡制により、壱岐島には壱岐と石田の二郡が置かれた。天平八年（７３６年）には阿倍継麻呂を正使とする遣新羅使が浪速津の港から、瀬戸内海を通り、壱岐、対馬を経て新羅に渡ろうとする。一向は途中、周防灘で嵐に遭いながらも、壱岐島に着いたが、随員の雪連宅満（伊伎宅麻呂）がにわかに疫病を発症し亡くなってしまう。遣新羅使の仲間内の誰かが、宅麻呂の挽歌として作った。宅麻呂は「連」とあり、高官である。姓は雪の一字、名は宅満と二字であり、支那の渡来人である。

勝本町本宮仲触　浦海海岸の「雪の島」

遣新羅使は数年毎の往来があったから、今日のコロナウイルスの流行であったのかも知れぬ。新羅からの使節は都に入れず、太宰府止まりにされた期間もあったようだ。
宅満は石田に葬られた。石田とは石のある田圃ではなく、開墾に適さない土地と云う意味である。壱岐はやはり漁業の島である。
壱岐には「雪の島」という海中から顔を出している岩、黒崎砲台、猿に見える「猿岩」が名勝としてある。

令和五年四月二十七日

大中臣正比呂